

泉穂の いまどき 恋愛講座……



「全話と視線が上手にあやつれますか？」

恋を、とくにはじまったばかりの恋を、情熱的なものにするか、あるいは失望をともなう破綻の方向へと導いてしまいかは、「全話」と「視線」にかかっているのではないだろうか。

たとえば、パブリックな場で一人の魅力的な男性と出会う、ルックスだけでなく、その男性が周囲に放っている空気を、歩き方、グラスを傾げる様子、シニカルに微笑むやり方、もしくはたまた無造作にポケットに手を入れる仕草、などを見た上で、自分の気に入ったと思う場合、そして幸運にも相手も自分を気に入る、とても素敵なことにも、自分から二人で立ち去る、もしくは日を変えて二人きりで会う約束にこぎつけたとして、その時に彼が、自分自身のことをトウトウと語り始めたり、車やファッションなどの、なにか私に興味のない「情報」について話し続けたとしたら、おそらくその時点で、彼に見切りをつけると思うのだ。

まずそれらはたぶん「全話」ではない、と思う。自分のことをトウトウと語る、情報を話す、というのはオシヤベリであって全話ではない。全話は、どちらか一方からもう一方へ流れるものではなく、自分自身の思想や価値観のまったく感じられない言葉の羅列でもないのだ。

特に、気に入った同士の男と女が、恋の兆しを感じた一組のカップルが、わざわざ二人きりの時間を持つことに同意したのであれば、全話は「二人の関係」の周囲にとどまるのが理想というものだ。

「あなたをパーティーで見た時、これはヤバイと思いますよ。知り合ったら最後、男は自分を危険にさらす羽目におちいる」と彼、ニヤリと笑う。

「残念ね。あたしは、あなたが思っているような、男を破滅させる類いの魅力ある女であつたことなど、一度もないわ」
女は片方の肩だけをあげて彼をチラリと見る。

「もちろん、その真相は自分てたしかめましますよ」

「身を滅ぼすかもよ」
「あるいは、あなたの方が破綻するかもしれない」

二人は牽制するように見つめ合つて、それから陽気に笑い合う。

そんな全話を、さらりとできる成熟した男性が、この日本にどれだけのいるのだろうか？ 車やファッションや自分自身についてではなく、出会ったばかりの女と自分の関係について、全話をできる男が。

こういうことをただのキザだと思つていけるなら、いつまでもマンガを読み、アクション映画に興じ、日曜日にはゴロリと寝転んで鼻くそでもほじりながら野球や相撲を見ていければいい。

一方、女たちは映画や本の中で粋な全話をいくつも経験し、想像の中でシミュレーションし、準備万端、ひりひりとするような全話と視線を巧みに使える、ひと握りの男性を探し出すのだ。もし、身近にいないのなら、海を渡つても、もしくは海を渡つてやってきた男たちの中に。

日本が好景気だった時代に、男のコたち

の外見は飛躍的に磨かれたのかもしれないけれど、粋な全話、上手な視線の使い方を修得した人はほんとうに少ない。なぜならそれらはファッションと違つて、お金を解決することができないのだから。

つい数年前まで、ティーンエイジャーのアイドルを追いかけていた男のコたちは、そのまま年を重ね、女子高生の制服に憧れ、若さこそが美德だと心から信じるような、恐るべきオジサンになつていくに違いない。

成熟した大人の女性や、大人の女性が体現するものを敬遠しながら、おもに、自分が太刀打ちできない、という理由で。

この前、友達とビーチに行った時、女のコ同士でビーチに行くなど実に初めてだった私は、すうりと長身で魅力的な男のコたちが、「ねえねえ、どこから来たの？」「いくつ？」「なにしてんの？（つまり職業を尋ねている）」とワンパターンの構成で声をかけてくることに、心から失望した。充分に、ルックスだけなら合格点をあげたい男のコたちが、だ。

「私ね、人妻なの。年は35」とニコリ笑つて言う。「うそおノ」と彼ら。「もちろん、嘘、ほんとはオカラジエンス」「まじり」「嘘、高校の教師」「ほんとう？」「子供も一人いるわ」「うそおノ」「どこであなた、うそお、まじり？、ほんとうしか言つてないけど……」「ほんとう？」所詮、この程度なのである。ほんとうに残念。

マンボカー バラタイス マンボカーの秘密②

マンボカーとはいったいどんなクルマかはさておき、マンボカーで訪れてみたいドライブコースのご紹介から今月はいっていきましょう。もともと今年のように雨ばかりの夏で、ドライブなんて行つてないよという人にはこれからの季節せいせい紅葉で

MARUOKA IZUHO

【プロフィール】1965年生まれ。同志社女子大学卒、練馬通ブックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「あふれた無邪気が罪になる」(PHP研究所)、「キスまで、待てない」(大和書房)など。

HAP HAZARD REMARKS

す。それでそこに何かあるかという、大秦映画村にも勝るとも劣らない、タイムスリップ空間、平成に甦る昭和文化生活を見ることができるところです。まあどこもかしこにでもというわけではありませんが、水原弘のキンチョールや、由美がおるのアースレッドのヒーロー看板の類は、たぶんかなり良いコンディションのモノが見つかることでしょう。そして、大間々あたりのお菓子屋さんに行くとき、デッドストックのお菓子が堂々と売られているのてし

水沼温泉駅や、トロッコに乗って入っていく足尾銅山観光なども、東京の人でもなかなか知らないシークレットマンボスポットです。せつかつきから、クルマは大間々駅前の無料駐車場にでもおいて、マンボな汽車にもぜひ乗ってみてください。ところでマンボなクルマっていったいなんなんですか。深まる謎は次号へ持ち越し！

ヨーロッパのパカンスシーズンとなる8月はパリやミラノに在住している日本人のデザイナー達が日本に帰省してくる。いつも、日本の暑さに閉口している彼らだが、今年はこの冷夏に驚いていた。

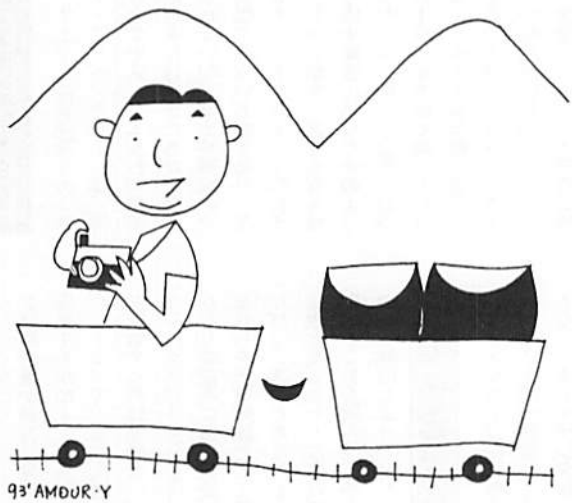
ヨーロッパでファッションの修行を志す若い連中は、年を追うごとに増えている。学校に通う人もいるが、クチニールメゾンのデザイナーとして、医者やインテリアのデザイナーとして、例えばクチニールエに指示されるまま針や挟を渡すような、真面目にこなしている。決して恵まれた給料を彼らは手にしていないが、普段の仕事の合間に作ったという個人的作品を見せてもらうのは楽しい。今年もそんな作品を帰省のついでに見せに来てくれたデザイナーに、日本の不景気、特に今の日本の服の売れない状況を話すのは、非常に心苦しい。

デザイナービジネスはほとんど厳しくな

着だおれに
京都人へ
送る。

ササイな情報

7



っている。あのケンゾーがルイ・ヴィトンやデオールなどを展開するパリのコングロマリット、アガツシユグループに買収され、このコラムの1回目で紹介したマルタ・マルジェラの1回目で紹介したマルタ・マルジェラ社は倒産した。これから独立しようとしている若いデザイナー達は、世界的なバブル時期を見て、夢を描いているだけに、それを壊すようなことは言いたくないが、一休次の世のデザイナーが、何を見れば良いのか、うまく助言できないのが残念だ。

そんなデザイナー不遇の時代に、唯一元気がいいのは、相変わらずアネエス。パリの組み合わせて好きでパリのエスプリをという、服作りの姿勢は10年前から全く変わらないのが正直にすごいと思う。彼女が新婚旅行で中国に行った時、羽毛入りのコートを買って、それをパリに持ち帰

も楽しんできてください。クラブフェイエムの読者は、関西あたりのドライブエリアをいままら私なんぞに説明されてもしょうがないでしょうから、ここは雑誌やガイドブックなどではまったく取り上げられていない超レアな関東近郊のマンボスポットを紹介しましょう。なにかのついでに近くまで行った際は、是非立ち寄ることをお勧めいたします。て、ここはどこかと申しますと群馬県と栃木県にまたがる、渡良瀬川流域。そう森高千里の♪渡良瀬橋でも有名なようになった足利、桐生といったあたりです。とにかく高速道路を使っても行きにくい。関越自動車道の東松山、東北自動車道の館林のどちらからおりても1時間は一般道を走るようになります。まあ不便なところほどマンボなところだとは言いますが、確かにちよつとくらくら行きにくいところにマンボなスポットというものはあるものなので

た。お菓子のデッドストックだぞ。私はこの前、明治のなんきんまねを買ってしまいました。もちろん当時の定価です。フルヤのウィンターキヤラメルを買った友人もいるのですよ。そればかりではなく、おそば屋さんの出前になんトラビッツスクーターが現役で活躍していた、それはそれはイカス光景。入場料としてのヤラセではないところがまた嬉しい。ハウステンボスよりも日光江戸村よりもスゴイ、パーチャルマンボタウンなのです。そしてJR桐生駅より、国鉄時代は足尾線と呼ばれていた第3セクターのわたらせ渓谷鐵道というのが渡良瀬川沿いに走っています。これがまた、つい5年ほど前に開業したときに新車のデイズルカーにすべて入れ替わっている筈なのに全然新しく見えない。もう20年は走っているような車両のデザイン。何を隠そう私がデザインしています。ホームに直結の

り短く切ってショートブルズンに仕上げたのが、サクセスストーリーの始まりというエピソードも、アネエスらしくて好きだ。

そんなアネエスの、好きなアイテムを自由に組み合わせて、ショーはしないからコストが安く値段も手頃、というスタンスのブランドが今秋あたりから日本でも沢山デビューする。日本ではA.Tのアップウ・タヤマがデザイナーする「オゾック」や「23区」なども登場だが、パリで去年あたりから話題になっていた「ロフト」も今秋から日本に上陸する。日本からも数多くのアパレルや商社が狙っていたブランドだけれど、商標権の問題などで、日本でのデビューが遅れていたフォーブル・サントノール、マル地区などパリに3店舗あるお店で、黒いテントにL O F Tと書かれたフティックをパリに行った人は覚えていたかもしれない。

ユニセックスが基本のその商品は、カッ

トソーやシャツが中心で、値段も手頃。GAPの1ランク上といった感じで、ダンガリーのシャツや靴降りのトレーナーなど、アメリカンカジュアルをパリっぽいテイストでデイズプレイしてある。半袖のTシャツはちゃんと胸ポケットで、余分なデザインは一切なし。シャツで7,000円程度と普段着としての理想。香港製でも問題なし。休みの日はこれで十分。価格もパリと同じ程度というからこれは期待。でも、本当にパリと同じ様にソックス1足から商品着の袋に入れてくれるのだろうか。

ただ、間違っているのは、アネエス同様これはデザイナーブランドじゃない。というところ。両者を同じ土俵で語ると多くの誤解だけが残る。日本ではその辺がクリアにされないまま時代が進んでいく。時代のステートメントがどこにあるかは、京都の人は良く御存知だと思っけれど...

NODA TATSUYA

【プロフィール】1959年京都生まれ。流行通信社・WWD ジャパン編集部デスク。東京中心のファッション情報のおかげで、関西に留まり、10年以上にわたり世界の服飾産業を現場で見てきた。91年より大阪コレクションの運営委員として、海外、新人のデザイナーのショーもサポート。

PARADISE YAMAMOTO

【プロフィール】元東京パノラママンボボーイズのコンガ奏者。富士工業デザインセンターで、カーデザイナーとしても活躍していた。マンボ魂伯ノリマンチアキラとともに東京ラテンムードデラックスという種なバンドを最近結成。近いうちに京都でも公演の予定とか！